

報 告

児童虐待に対する短大・大学生の意識

辻野久美子¹⁾, 塚原 正人¹⁾, 飯野 英親¹⁾
市原 清志¹⁾, 村上 京子¹⁾

〔論文要旨〕

児童虐待について, 短大・大学生357名に質問紙調査を行い, 若者を対象にした児童虐待防止の啓発に有用と思われる知見を得た。

虐待の発生要因, 予防策, 通告の義務, 保健所の役割について学生は知識が乏しく, 繰り返し啓発が必要と思われた。半数の学生は理由があれば体罰をしつけと認め, その傾向は幼い頃親によく叩かれた者に強く, 親になる前からしつけと体罰について問題意識を持ち, 認識を深めることの必要性が示唆された。虐待する親の気持ちを理解できる者は3割で, 児童虐待に関連した親の心理について考える機会と, 情報の提供が必要と思われた。若者の多くは子どもに良いイメージを持ち, 育児に対しても肯定的だった。

Key words: 児童虐待, 虐待防止, しつけ, 体罰, 育児不安

I. 緒 言

近年わが国においても児童虐待が深刻な社会問題となり^{1)~4)}, 2000年には「児童虐待防止法」が施行された。そして虐待の発生防止と虐待死減少を「健やか親子21」の目標に掲げ⁴⁾, 現在全国で「虐待防止ネットワーク」による活動が, 精力的に行われている¹⁾³⁾⁵⁾⁶⁾。しかし, それでも児童虐待の悲惨なニュースは後を絶たず, 虐待防止は社会全体で取り組むべき緊急課題となっている^{7)~9)}。

このような状況下で, これから親になる若い世代が児童虐待について問題意識を持ち, 理解を深めることは, 将来の児童虐待防止に繋がると考え, 児童虐待に対する若い世代の意識調査を通して, 親になる前の若者を対象にした虐待防止の啓発について考察した。

II. 対象および方法

平成13年5月下旬から6月下旬に, 山口県内の短大または大学に在籍する2年生405名を対象に, 質問紙調査を行った。事前に, 調査目的および調査への協力は任意であり, 断っても不利益が生じないことを十分説明し, 無記名で実施した。質問紙は休憩時間に配布し, 回収箱を設置して同日回収した。

対象の内訳は, 短期大学看護学科80名・保育科150名, 大学の人文学部85名・工学部90名である。

質問項目は基本属性, 児童虐待についての学習経験と学習内容, 児童虐待に関する知識 (①虐待の種類, ②発生要因, ③親・子どもへの支援策, ④防止方法, ⑤支援機関, ⑥通告の義務), しつけと虐待の違い, しつけのために叩くことは必要か, 幼い頃親に叩かれた頻度, 児童虐待のニュースを聞いた感想, 虐待する親の気持ち

Analysis of Recognition on Child Abuse among Junior College and University Students
Kumiko TSUJINO, Masato TSUKAHARA, Hidechika IINO, Kiyoshi ICHIHARA, Kyoko MURAKAMI

[1505]

1) 山口大学医学部保健学科 (研究職)

受付 03. 2.14

採用 04. 9. 3

別刷請求先: 辻野久美子 山口大学医学部保健学科母子看護学講座 〒755-8505 山口県宇部市南小串1-1-1

Tel/Fax: 0836-22-2806

がわかるか、被虐待の経験、虐待の目撃経験、将来わが子を虐待すると思うか、子どもに対する意識（子どもが好きか、欲しいか、育児に興味があるか）の20項目である。質問項目は独自に作成し、「虐待する親の気持ちがわかるか」、「しつけのために叩くことは必要か」、「叩かれた頻度」については、玉井⁸⁾と衣笠¹⁰⁾の意見を参考にした。回答には選択式と記述式を用いた。記述式の項目は、児童虐待に関する知識の②～④およびしつけと虐待の違いである。

データ処理は単純集計の他に、多重ロジスティック回帰分析（ステップワイズ法）を行い、記述式を除く全項目について、関連を検証した。統計分析ソフトにはStatFlex Version 5（アテック、大阪）を用い、変数の選択基準は有意水準1%とした。

Ⅲ. 結 果

質問紙の回収率は88.6%で、そのうち子どもを持つ2名を除いた357名（88.1%）について分析した。被虐待の経験者は15名（4.7%）、虐待の目撃経験者は12名（3.4%）だった。対象の年齢は18歳から30歳、平均年齢は19.3歳である。対象の基本属性を表1に示した。

1. 児童虐待に関する知識

児童虐待について学習経験のある者は半数に満たず、人文・工学部では2割以下だった。学んだ時期は高校時代と短大・大学が多く、様々な学科目で取り扱われていた（表2）。学習した内容も様々だった。

虐待の知識として、「虐待の種類」は学生の9割が知っていた。「虐待の発生要因」では、親のストレスなど親側の要因について記載した

表1 対象の基本属性

学部・学科*	性		人(%)	平均年齢 (歳)	核家族 人(%)	同胞		
	男	女				1人	2人	3人以上
看 (n= 51)	2(3.9)	47(92.2)	2	19.4	41(80.4)	6(11.8)	26(51.0)	19(37.2)
文 (n= 80)	21(26.3)	57(71.3)	2	19.2	52(65.0)	7(8.8)	39(48.8)	34(42.6)
工 (n= 83)	76(91.6)	3(3.6)	4	21.4	54(65.1)	11(13.3)	38(45.8)	29(34.9)
保 (n=143)	28(19.6)	110(76.9)	5	19.3	92(64.3)	16(11.2)	58(40.6)	66(46.2)
計 (n=357)	127(35.6)	217(60.8)	13	19.8	239(66.9)	40(11.2)	161(45.1)	148(41.5)

*；看：看護学科，文：人文学部，工：工学部，保：保育科

表2 児童虐待に関する学習について

人 (%)

学部・学科*	学習経験 あり	時期（複数回答）				学科目（複数回答）				
		小学校	中学校	高校	短大・ 大学	道徳	保健	ホーム ルーム	倫理 社会	その他
看 (n= 51)	16 (31.3)	0	2 (3.9)	10 (19.6)	5 (9.8)	5 (9.8)	2 (3.9)	2 (3.9)	2 (3.9)	6 (11.8)
文 (n= 80)	16 (20.0)	0	2 (2.5)	10 (12.5)	6 (7.59)	3 (3.8)	3 (3.8)	4 (5.0)	1 (1.3)	7 (8.8)
工 (n= 83)	11 (13.3)	2 (2.4)	6 (7.2)	6 (7.2)	0	3 (3.6)	5 (6.0)	4 (4.8)	1 (1.2)	2 (2.4)
保 (n=143)	123 (86.0)	0	9 (6.3)	54 (37.8)	76 (53.1)	13 (9.1)	12 (8.4)	13 (9.1)	9 (6.3)	75 (52.4)
計 (n=357)	166 (46.5)	2 (1.2)	19 (11.4)	80 (49.1)	87 (52.4)	24 (14.7)	22 (14.5)	23 (13.9)	13 (7.8)	90 (54.2)

*；看：看護学科，文：文学部，工：工学部，保：保育科

者は多かったが、子ども側の要因については記載がなかった(表3)。「親への支援策」では、親にカウンセリングを受けさせるという回答が最も多く、親と子を離すという意見はわずかだった(表3)。「虐待の防止策」については、防ぐことはできないと回答した者も少数いたが、8割は記載があった。最も多かったのは地域交流が大切という意見で、その他相談できる環境を作るという意見もあった。しかし、親が

表3 自由記載による回答の一部と回答数
(複数回答)

設問および回答	回答数 人(%)
虐待の発生要因	325/357(91.0)
親のストレス	126/325(38.8)
親が未熟	96(29.5)
虐待の連鎖	73(22.5)
相談相手がいない	48(14.8)
育児負担の偏り	19(5.8)
親への支援策	292/357(81.8)
カウンセリング	144/292(49.3)
罪を認識させる	56(19.2)
子育てを勉強させる	18(6.2)
原因をつきとめる	17(5.8)
子どもの気持ちを理解させる	15(5.1)
子どもと離す	13(4.5)
子どもへの支援策	295/357(82.6)
カウンセリング	114/295(38.6)
親から離し、保護する	59(20.0)
愛情を注ぐ	49(16.6)
虐待を防止する方法	295/357(82.6)
地域交流が大切	81/295(27.5)
相談できる環境を作る	69(23.4)
親になる前に子育てについて勉強する	52(17.6)
社会が変わるしかない	23(7.8)
防ぐことはできない	22(7.5)
しつけと虐待の違い	322/357(90.2)
☆しつけ	
常識を教えること	108/322(33.5)
子どものためを思っている行為	85(26.4)
愛情がある	52(16.1)
理由があって叩く・叱る	31(9.6)
☆虐待	
理由がないのに叩く・叱る	101/322(31.4)
一方的な行為	93(28.9)
感情的な行為	67(20.8)

自ら救いを求めるなど親の主体的な行動に関する記載はなかった(表3)。

「虐待事例への支援機関」として最も知られていたのは児童相談所で、保健所は半数以下だった(表4)。「通告の義務」についても知っていた者は半数で(表4)、虐待について学んだにも関わらず知らなかった者が3割いた。

2. しつけと虐待について

しつけと虐待の違いについて、「しつけ」は常識を教えること、「虐待」は理由がないのに叩く・叱ることだと記載した者が多かった(表3)。しつけのために子どもを叩くことを「必要」と答えた者は全体の約半数で、「不要」は約2割だった(図1)。

幼い頃親に叩かれた頻度は「時々」が最も多く、「よく叩かれた」者は約2割、「まったく叩かれなかった」者は1割だった(図2)。「しつけのために叩くことは必要ですか」に対する回答と「学部・学科」、「親に叩かれた頻度」は関連があり、叩くことは「必要でない」と答えた者は、保育科の学生と親に叩かれた頻度の少ない者に、有意に多かった(それぞれ $P<0.01$, $P<0.001$)(表5)。

3. 虐待のニュースを聞いた感想、親の気持ち、わが子を虐待すると思うかについて

児童虐待のニュースを聞いて、「親もかわいそう」と思う者は3割弱だった(表4)。虐待する親の気持ちが「わかる」者は3割で(図1)、被虐待の経験者と虐待のニュースを聞いて「親もかわいそうと思う」者に有意に多かった(それぞれ $P<0.01$, $P<0.001$)(表5)。

将来、わが子を虐待すると「思う」と答えた者は9名(2.6%)で、その中に被虐待の経験者が3名いたが、この項目と「被虐待の経験」の間に有意な関連はなかった。「わからない」と答えた者は3割だった。

4. 子どもについての意識

「子どもが好き」、「子どもを欲しい」と答えた学生は8割を超え、7割が育児に関心があった(図3)。希望する子どもの数は平均1.97人だった。「子どもが好きですか」の回答と学生

表4 虐待のニュースに感想を持った者、虐待に関する知識があった者

人(%)

	看護学科 (n=51)	人文学部 (n=80)	工学部 (n=83)	保育科 (n=143)	全体 (n=357)
虐待のニュースをきいて思うこと					
なぜ虐待するのだろう	32(62.7)	43(53.8)	50(60.2)	108(75.5)	233(65.3)
あんな親にはならない	32(62.7)	23(28.8)	44(53.0)	81(56.6)	180(50.4)
親を許せない	20(39.2)	29(36.3)	38(45.8)	73(51.0)	160(44.8)
親もかわいそう	22(43.1)	25(31.3)	9(10.8)	37(25.9)	93(26.1)
虐待に関する知識					
通告の義務	25(49.0)	30(37.5)	18(21.7)	101(70.6)	174(48.7)
虐待予防支援機関					
①児童相談所	46(90.2)	72(90.0)	63(75.9)	138(96.5)	319(89.4)
②保健所	32(62.7)	37(46.3)	28(33.7)	72(50.3)	169(47.3)
③福祉事務所	10(19.6)	15(18.8)	3(3.6)	59(41.3)	87(24.4)

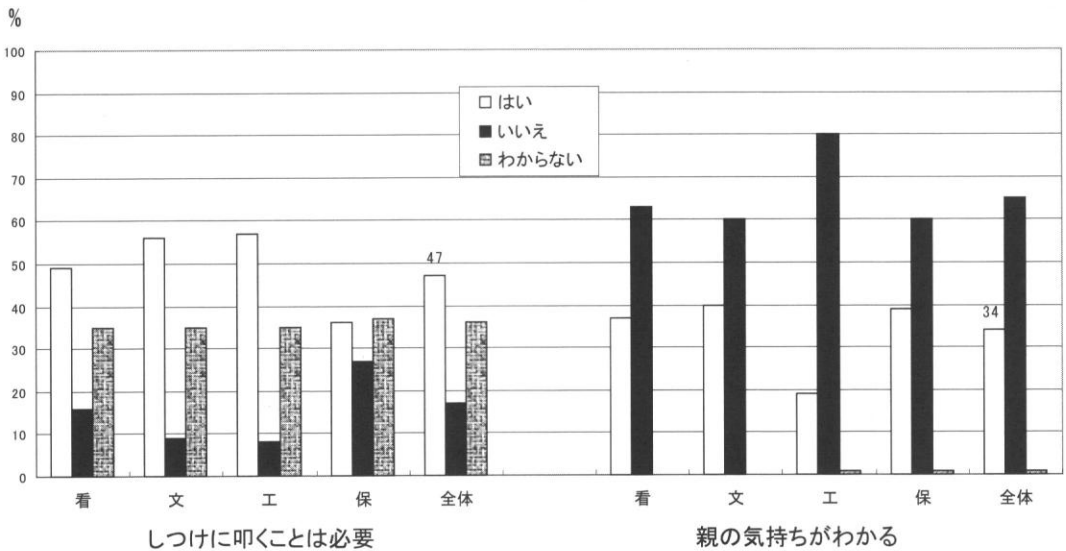


図1 「しつげに叩くことは必要」「虐待する親の気持ちがわかる」について

の所属する「学部・学科」は関連があり，人文学部で「好き」と答えた学生は，保育・看護学科および工学部に比べると，有意に少なかった ($P<0.001$) (表5)。「性」には有意な関連はなかった。

Ⅳ. 考 察

1. 繰り返し啓発が必要と思われる知識

子どもを持たない若者が，児童虐待を理解することには限界があるが，敬遠されがちな記述式の質問に対しても，全て8割以上の回答があ

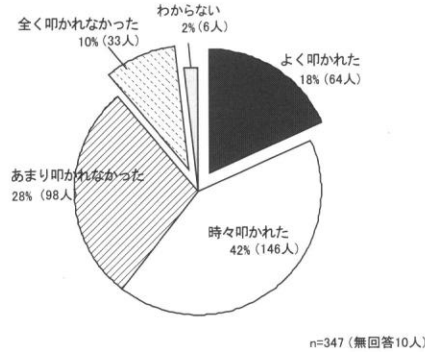


図2 幼少時、親に叩かれた頻度

表5 多重ロジスティック回帰分析（ステップワイズ法）で採択された変数と、従属変数との関連

従属変数 (有効データ数)	説明変数	回帰係数 (β)	標準誤差 (SE)	P値
子どもが好き (n=303)	年齢	0.0926	0.3820	0.808
	性 ¹⁾	-0.5136	0.6170	0.405
	文学部 ²⁾	-2.6370	0.5976	0.000**
	工学部 ²⁾	-1.9682	0.8440	0.020
親の気持ちがわかる (n=336)	年齢	0.1217	0.1460	0.405
	性 ¹⁾	0.5556	0.2664	0.037
	被虐待経験あり ³⁾	1.9880	0.6734	0.003*
	ニュースを聞いて親もかわいそうと思う ³⁾	0.8812	0.2666	0.000**
しついで叩くことは必要 (n=215)	年齢	-0.1102	0.1528	0.471
	性 ¹⁾	-0.5747	0.4029	0.154
	保育科 ⁴⁾	-1.1808	0.3781	0.002*
	被虐待経験あり ³⁾	-0.6311	0.8011	0.431
	叩かれ経験 ⁵⁾	-0.8483	0.2093	0.000**

* ; P<0.01 ** ; P<0.001

1) ; 男 = 0 , 女 = 1

2) ; 看護学科 + 保育科を基準カテゴリーとしたダミー変数

3) ; いいえ = 0 , はい = 1 (「わからない」は除外した)

4) ; 看護学科 + 文学部 + 工学部を基準カテゴリーとしたダミー変数

5) ; よく叩かれた = 1 , 時々叩かれた = 2 , あまり叩かれなかった = 3 , まったく叩かれなかった = 4

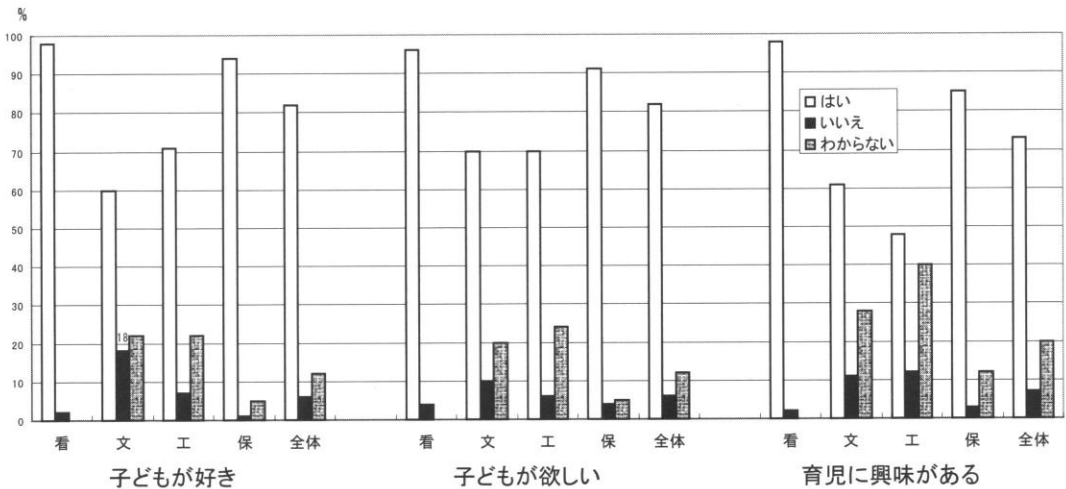


図3 子どもに対する意識

り、学生の関心は高いことが伺われた。今回学生の知識が十分でなかった項目として、①子どもの側にも児童虐待の発生要因がある、②親が自ら救いを求めることは虐待予防に重要である、③通告の義務および④虐待防止における保健所の役割が挙げられた。

学生にとって虐待の発生要因として子ども側

の因子をイメージすることは困難かもしれない。しかし、児童虐待の発生要因は多様で、発生メカニズムも単純ではない⁵⁾ので、発生要因を正しく理解しておくことは、虐待の予防と早期発見に不可欠だろう¹¹⁾。予防策として親が自ら救いを求めることについては、児童虐待は条件が揃えば誰でも虐待を起こす可能性がある

り⁶⁾⁸⁾、一人で悩まず誰かに相談することは重要である。「健やか親子21」でも児童虐待予防対策として「育児不安の軽減」を主要課題に挙げているが¹⁵⁾、若い親が抵抗感を持たずに育児支援サービスを利用できるよう、一人で悩まず誰かを頼ってよいことを、発信し続ける必要がある。また「虐待を防ぐことはできない」という意見に対しては、虐待死が1/4に減少したという大阪府の報告⁵⁾⁶⁾や、「虐待防止ネットワーク」の活動内容を繰り返し紹介することが有効と考える。

学生の半数は通告の義務と保健所の役割を知らなかったが、虐待の目撃経験者は12名もいた。通告の意義と義務はもとより、通告は匿名でもよいこと、虐待の確証がなくてもよいこと¹⁵⁾を、同時に知らせることが大事だろう。

2. しつけと体罰に対する意識

しつけと虐待の違いについて、学生の9割が回答した。しつけについては親の関心も高いことが報告されている¹³⁾が、注目したいのは学生の半数が、しつけのために子どもを叩くことを「必要」と考え、理由があれば体罰をしつけと認める意識についてである。さらに、しつけとして体罰を容認した学生は、幼少時親に叩かれた経験の多い者に有意に多かった。これらの結果は虐待防止を考える上で非常に興味深く、先行研究の「子どもを叩かず育てることが、わが子を叩かない母親を育てることになる。」という衣笠の意見¹⁰⁾は示唆に富んでいる。若者がしつけと体罰について日頃から問題意識を持ち、親になるまでに時間をかけて認識を深める姿勢は、将来の育児に影響を及ぼすだろう。しつけと体罰については、「たとえしつけの目的であろうと愛情表現であろうと、身体に外傷が生じる、または生じる恐れのある暴行であれば、身体的虐待に該当する。」という児童虐待防止法の条文¹⁴⁾を参考にしたい。

3. 親の気持ちを理解することについて

児童虐待における犠牲者は子どもだけではなく、虐待する親もまた犠牲者である¹⁵⁾という認識は、児童虐待を理解し予防する上で重要である。虐待はきっかけさえあれば容易に発生する

と言われ⁸⁾、育児不安に基づいた虐待予備軍の存在も報告されている²⁾⁷⁾。わが子に対してさえも非受容的な感情を持つ「養育感情のアンビバレント」の必然性を認めること¹¹⁾は育児支援の大前提であり、親の気持ちを理解することが親の孤立を防ぎ、安心して子育てできる環境作りのサポートに繋がる¹⁰⁾。したがってこれから親になる若者が親の養育感情を理解することは、若者自身の将来の子育てにおいても、虐待防止を考える上でも重要だろう。今回、虐待する親の気持ちを理解できる者、将来わが子への虐待について「わからない」と答えた者はそれぞれ3割で、皆無ではなかった。今後も児童虐待に絡む複雑な親の心理について情報を提供し、理解を求めることが大切だろう。

4. 子ども・育児に対する意識について

多くの学生は子どもについて良いイメージを持ち、育児に対しても肯定的だった。子どもが「好き」と関連のあった項目が性や他の項目ではなく、学生の所属する「学部・学科」だったことは興味深い。現在学んでいる学科目の影響なのか、進路を決める時既に子どもの好き・嫌いに差があったのかは不明である。しかし、若者が関心を持っている学問分野が、子どもに対する若者の気持ちを知る上で参考になるという情報は、啓発の対象を理解する際に有用と思われる。

以上、児童虐待に対する若者の意識から、虐待防止啓発について考察した。今後の課題は実践に向けて、具体的な方法を検討することである。今回の調査では、児童虐待について学習した者は半数以下であり、学校教育での取り組みを充実させることも大切だろう。しかし、看護師養成の大学・短大においてさえも、児童虐待に関する教育は十分ではないという報告もあり¹⁶⁾、今後医療従事者からの啓発はいっそう重要になるだろう。中でも、看護職者の果たす役割¹⁵⁾は大きいと考える。

V. 結 論

児童虐待に対する短大・大学生357名の意識調査から、若者を対象にした児童虐待防止の啓発に有用と思われる知見を得た。

1. 虐待の発生要因, 予防策, 通告の義務, 保健所の役割については知識が乏しく, 繰り返し啓発が必要と思われた。
2. 親になる前からしつけと体罰について問題意識を持ち, 認識を深めることの必要性が示唆された。
3. 児童虐待に関連した親の心理について, 考える機会と情報の提供が必要と思われた。
4. 若者の多くは子どもに良いイメージを持ち, 育児に対しても肯定的だった。

謝 辞

調査にご協力頂いた学生および教員の皆様に, 感謝いたします。(この論文の要旨は第23回日本看護科学学会で発表した。)

文 献

- 1) 子ども虐待の予防とケア研究会編. 子ども虐待の予防とケアのすべて. 東京: 第一法規, 2003.
- 2) 郭 麗月. 虐待する親へのケア ペアレンティングを高める. 助産婦雑誌 1998; 52: 15-19.
- 3) 稲垣由子. わが国における子ども虐待の現状. 小児科 1999; 42: 291-296.
- 4) 柳澤正義監修. 改訂子ども虐待—その発見と初期対応. 東京: 母子保健事業団. 1999.
- 5) 小林美智子. 虐待発生の背景. 周産期医学 2002; 32: 687-691.
- 6) 柳川敏彦, 小池通夫. 虐待防止の地域活動. 保健の科学 1999; 41: 583-587.
- 7) 才村 純. 子どもの虐待 その気づきと予防. 日医雑誌 2000; 124: 817-820.
- 8) 玉井邦夫. 子どもの虐待を考える. 東京: 講談社現代新書 2001.
- 9) 岡本伸彦. 虐待から子どもを守りたい. そして親も守りたい. 小児医療から見た小児虐待. ペリネイタルケア 2000; 19: 1282-1285.
- 10) 衣笠紀玖子. 母親の育児態度と意識および日常生活—母親の生育歴(たたかれ経験)と配偶者の母親への態度などからの検討. チャイルドヘルス 2000; 3: 52-56.
- 11) 小泉武宣. 低出生体重児に対する虐待予防対策. 小児科; 42: 306-313.
- 12) 森吉里奈, 餅原尚子, 羅丹, 児玉さち, 他. 親の養育感情に関する臨床心理学的研究. 小児保健かごしま 2001; 15: 9-12.
- 13) 高橋菜穂子. 保護者が欲している育児情報. 小児内科 2001; 33: 1359-1362.
- 14) 磯谷文明. 虐待と児童虐待防止法. 小児看護 2001; 24: 1825-1829.
- 15) 子どもの虐待への看護職の役割. 社団法人日本看護協会編. 看護職のための子どもの虐待予防&ケアハンドブック. 東京: 日本看護協会出版会, 2003: 23-30.
- 16) 村上京子, 守田秀子, 飯野英親, 岡光基子, 他. 基礎看護教育における小児虐待の位置づけと実態. 看護教育 2002; 43: 498-503.